

■自由投稿

畏兄 山口信夫氏著書（三作目）のご紹介

「山陰最後の殿様 定安と慶徳」

松本 耕司（16期）



山口信夫氏のことは2016年の近畿双松会の総会にご出席いただき、「オンジョー通りの唄」をご披露いただいたのでご記憶の方もあろうかと思う。

同氏は1943年川本町のお生まれで、島根県警本部の交通部長・刑事部長などを歴任された。演劇、音楽、絵画、柔道を愛好され、合唱団、環境市民団体での熱心なご活動が続けるかたわら、著作活動にも励まれ、私は奥様が北高同期であったことからご縁をいただいた。そのご活動は、まさに畏兄と呼ぶにふさわしい方である。

「松江三部作」とも言うべき、2016年の**第一作目**「国宝松江城秘話 誇り高きのぼせもん」は、明治維新に廃城の危機にあった松江城を救った雑賀の元足軽高城権八夫婦と、斐川の豪農勝部本右衛門親子の陸軍省広島鎮台との涙ぐましい闘いの軌跡が描かれ、我々は先人の努力に感謝し、松江城を市民挙げて大事にしなければならないことを教えてくれた。

2018年に刊行された**第二作目**「松江藩栄光への道 律儀者と不味さん」では、“ご滅亡”とまで言われた藩の財政危機を、律儀者と言われる家老朝日丹波と七代藩主治郷（不味公）が立て直し（御立派の改革）、やがて日本一豊かな藩になっていく過程が描かれ、現在の松江の文化風土がここに築かれたことを忘れてはならぬと教えてくれている。

その頃になって、漸く私も山口氏の著作過程は、専門家でないだけに、綿密な文献調査、現地踏査の上でのことと知った。言わば身を削る作業をしておられ、第三作目を手にした時には、ご年齢も考え、思いの深さと意志の強さには本当に驚いた。

その**第三作目**が「山陰最後の殿様 定安と慶徳」で、将軍慶喜の異母兄として水戸家から入り、鳥取藩最後の藩主となった池田慶徳公と、親戚藩である津山松平家から松江藩に入り松江藩最後の藩主となった松平定安公の二人が主人公で、そのまま「激動の山陰維新史」となっている。

鳥取藩における激しい佐幕・勤王の藩内抗争・・・松江藩における山陰道鎮撫使事件、特に薩長から突き付けられた「松江藩家老の切腹を含む謝罪の四箇条」での「家老の切腹」は慶徳公の計らいですでのところで見られるが、今度は松江藩の長年の失政による「隠岐騒動」が定安公の手足を縛る様子・・・が、息をも継がせぬ展開で描かれていく。

特に、徳川親藩であるが故に懸命の努力をしながらも、時代の波から見放されていく定安公の心情が活写されていることに心を打たれる。



左から三作目、二作目、一作目

歴史の評価では、慶徳公は優柔不断、定安公はくそ真面目と言われて高くはないようだが、果たしてそれだけであろうか。山口氏は定安公が選んだ不戦の道の選択が、国の分断の回避に大きく貢献したと考えているようだ。

定安公が現実には松江の街と人を戦禍から守った事実は、第一、二作に続いて、ここにも松江の大恩人がいることを山口氏は教えてくれている。勿論、家老の切腹を防いでくれた慶徳公も。

定安公は明治になってからも、様々に松江のために尽くされたと聞き、私も定安公生地の津山には足を向けて眠れないな、などと考えている。

山口氏は三作品を通じ、今日の松江をつくった大恩人たちを松江の関係者には知ってもらいたいという思いを強く持って著作されたことが伝わってくる。近畿双松会の皆様にも機会があればお読みいただければと思い、ご紹介する次第である。



※発売は「今井出版」。アマゾンで購入可。

一作目：在庫ナシ、二作目：1870 円、三作目：2200 円。

問い合わせは私まで⇒ k-matsumoto@hi-ho.ne.jp

山口氏の近影

(通学見守りボランティアでも奮闘)